

5年1組 国語科学習指導案

授業日 平成25年9月25日（水）5校時
 授業者 附属新潟小学校 教諭 里村 穰
 会場 5年1組教室

- 1 単元名 「インスタント食品について考えよう」
 教材名 「インスタント食品とわたしたちの生活」（東京書籍5年下）
 「食を考える」（自作）

2 本単元の価値

本単元は、学習指導要領の第5学年及び第6学年の以下の内容を受けて設定する。

C 読むこと（2）内容

ウ 目的に応じて、文章の内容を的確に押さえて要旨をとらえたり、事実と感想、意見などとの関係を押さえ、自分の考えを明確にしながらい読んだりすること。

本単元では、教材文として「インスタント食品とわたしたちの生活」「食を考える」を扱う。どちらの教材文も、話題は、インスタント食品である。インスタント食品は、生活の中でよく使われているものであり、子どもにとって身近なものである。

「インスタント食品とわたしたちの生活」では、「便利さを上手に生かしながら、豊かな食生活をつくりあげていきたい」と筆者の考えを主張している。この主張の理由や根拠として、インスタント食品の良さ（4事例＝料理時間の短縮・家庭と同じ味・長期保存・安価）と、問題点（3事例＝家庭の個性の喪失・料理不得手の増加・栄養バランスの欠如）の事例を挙げている。

「食を考える」では、「インスタント食品をなるべく使わずに、豊かな食生活をきずきあげていきたい」と筆者の考えを主張している。この主張の理由や根拠として、インスタント食品の良さ（3事例＝手軽さ・地球環境にやさしい・購入のしやすさ）と、問題点（3事例＝食品添加物の大量摂取による健康への害・塩分過多による生活習慣病の不安・心のこもらない料理）の事例を挙げている。

本単元で、これらの教材文から学ぶ価値は、次のとおりである。

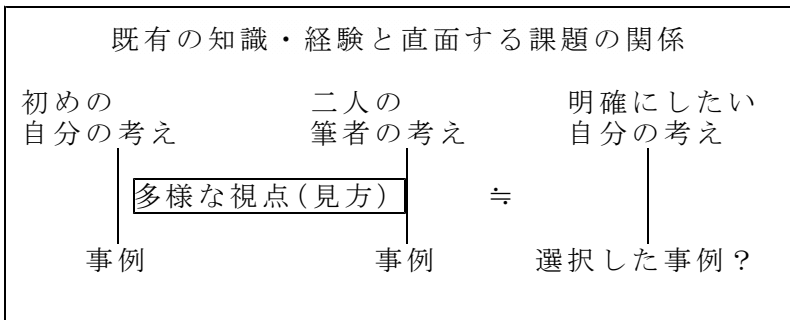
- ① 話題として、子どもに身近なインスタント食品を取り上げていることで、これまでの自分の知識や経験とつなげて、文章を読む前の自分の考えをもちやすい。また、取り上げられている事例についても、自分の経験とつなげて考えることができる。
- ② インスタント食品の良さと問題点との両面の事例が複数取り上げられていることで、自分の考えを視点にして自分に必要な事例を選択し、自分の考えを明確にすることができる。

3 本単元で目指す姿と学びをつなぐ場面、「考えるすべ」

本単元で目指す子どもの姿は、自分の考えを視点に必要な事例を選択して考えを明確にし、明確になった考えを認識する子どもである。この姿が、**自分の考えを明確にしながらい読もうとする子ども**の姿が具現されたものである。

この目指す姿になるためには、「自分の考えを確かなものにするために読みたい」という目的意識をもち、整理・分析することで獲得した多様な視点を基に、複数の事例から自分に必要な事例を選択し、「この事例を選ぶことで自分の考えをより明確なものにできるだろう」という見通しをもつ場面が大切であり、ここが学びをつなぐ場面である。

学びをつなぐために、まず、話題に対する自分の立場を決めさせる。立場を決めるために、子どもは、インスタント食品について、これまでの生活経験や知り得た知識を根拠にして考える。この考えを、インスタント食品について初めにもった考えとする。ここで、インスタント食品討論会を開くことを伝え、今の段階の考えで討論会が出来そうかを問う。すると、子どもは、「まだ出来ない。インスタン

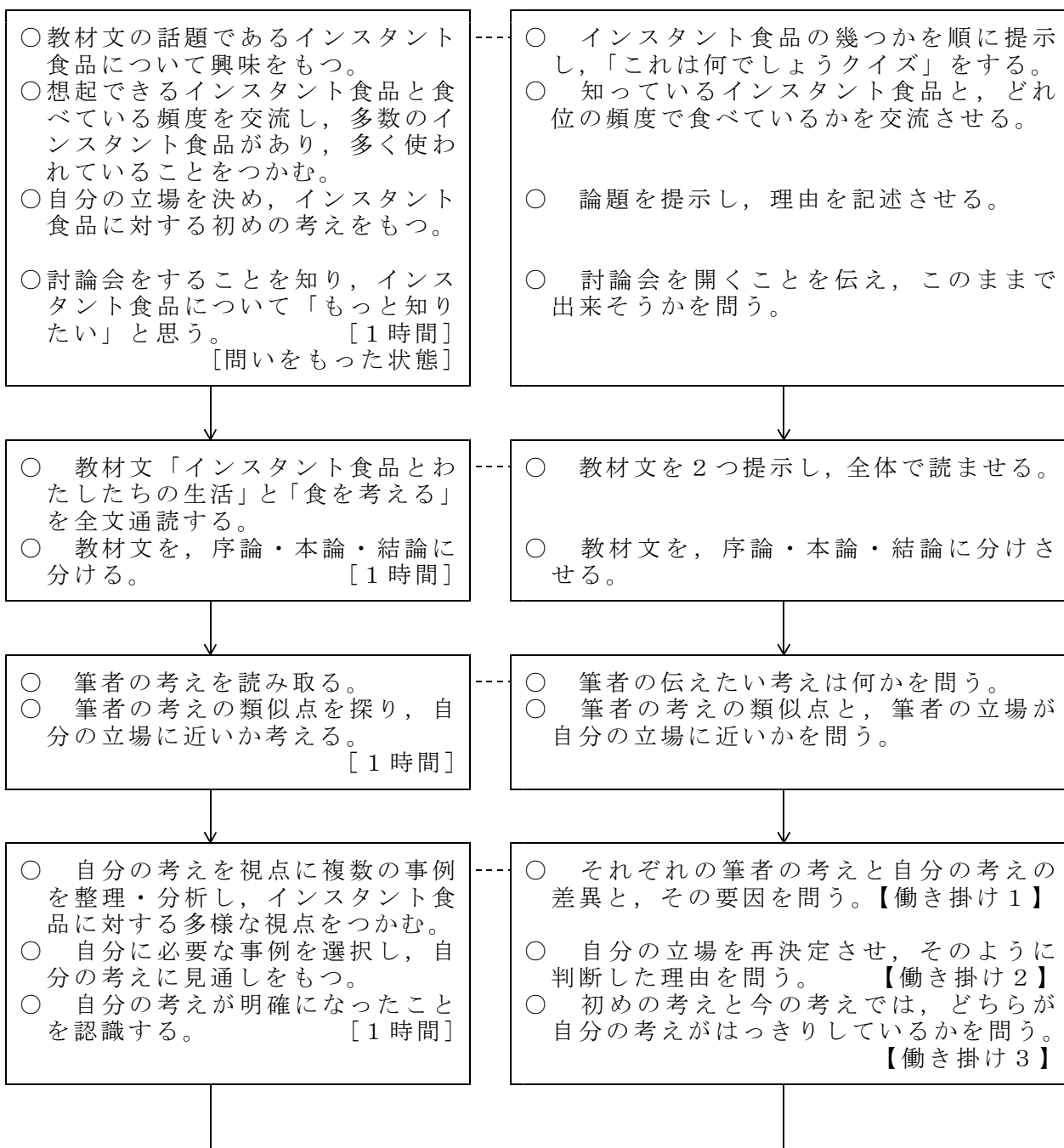


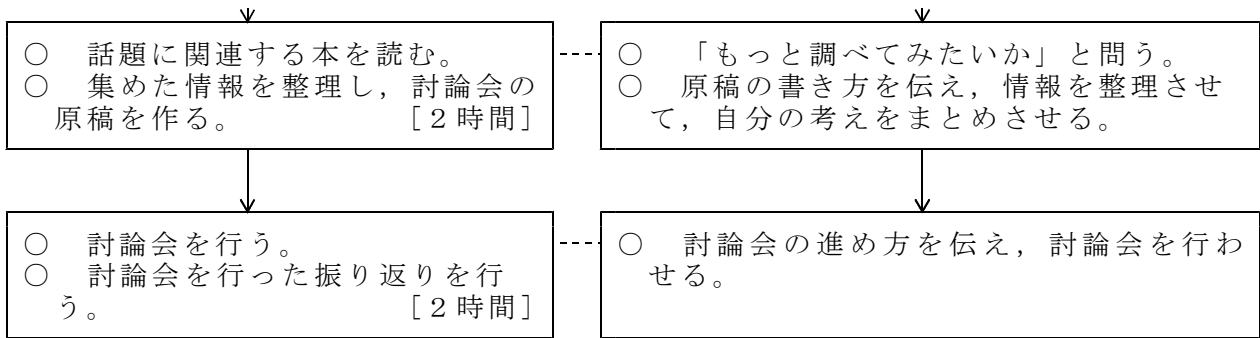
ト食品についてもっと知りたい」という意識になる。この「もっと知りたい」という意識を、「自分の考えを明確にしたい」という問いをもった状態とみなす。この状態の子どもに、教材文を2つ提示して読ませる。初めに考えをもっている子どもは、それぞれの筆者の考えと自分の考えを比較し始め、考えに差異があることに気付く。この差異が生じる要因を問うことで、子どもは、考えの理由や根拠となる複数の事例に着目し、事例の整理・分析を始める。複数の事例を整理・分析することで、話題に対する多様な視点をつかむ。話題に対する多様な視点をつかむことで、子どもは、初めに決めた自分の立場の根拠だけでよいのか迷い始める。この段階で、自分の立場を再決定させると、子どもは、**自分の考えを視点に「比較するすべ」を使い、筆者の挙げる事例と筆者の考えの関係と自分の選択した事例と自分の考えの関係とをつなげ**、自分に必要な事例を選択し、自分の考えに対する見通しをもつ。さらに、「なぜそのように判断したのか」と問い、理由を記述させることで、子どもは、明確にした考えを表現する。この考えを表現している姿が、学びをつなげている姿である。

4 指導計画 全8時間(24Q)

《学習活動・子どもの意識》

《働き掛け》





5 指導の構想

単元の導入では、インスタント食品の実物（インスタントコーヒー・即席みそ汁・即席カップメン・包装米飯）をクイズ形式（「これは何でしょう？」）で順に提示し、2つの教材文に共通する話題であるインスタント食品に興味をもたせる。次いで、インスタント食品についての生活経験を交流させた後、「ほとんどの人が食べたことのあるインスタント食品は、自分の食生活の中で使う方がよいか、使わない方がよいか」と論題を提示し、自分の立場を決めさせる。子どもは、これまでの生活経験や知識を根拠に考え、自分の立場を決める。立場を決めた段階で、「これから、みんなでインスタント食品についての討論会をしようと思います。今の段階で、討論会は出来そうですか」と問う。子どもは、「まだ出来ない」「もっと、インスタント食品について知ってからがよい」という意識になる。この意識の状態を、問いをもった状態とする。

ここで、教材文「インスタント食品とわたしたちの生活」と、「食を考える」を順次提示し、読ませる。それぞれの筆者の考えは、全体で読み進めて確認する。それぞれの筆者の考えを読み取った子どもは、どちらの筆者の考えにも共通する「豊かな食生活をつくりたい」という考えが、自分の考えとはまったく異なることに気付く。ここで、「それぞれの筆者の立場は、自分の決めた立場に近いか」と問う。子どもは、筆者の考えの記述の中から自分の考えの類似点を探し始める。すると、「便利さを生かす」「なるべく使わない」という記述から、どちらの筆者も使う立場にいると判断する。ただし、「使う」「使わない」といった断定的な表現ではないため、自分の考えとの差異を意識する。この意識の子どもに、以下のように働き掛ける。

働き掛け1

それぞれの筆者の考えと自分の考えの差異と、その要因を問う。

それぞれの筆者の挙げる複数の事例を整理・分析させ、話題に対する多様な視点を見出させる働き掛けである。それぞれの筆者の考えと自分の考えとの差異を意識している子どもに、「どの点が自分の考えとは違うとと思っているのですか。なぜ、そのような違いがあるのだと考えますか」と問う。筆者の立場がどちらに近いのかを検討し、自分の考えとの差異を意識した子どもは、意識した差異の要因を事例に求め、それぞれの筆者の挙げる事例をインスタント食品の利便性と問題点とで整理し、それぞれの事例を根拠にして差異の要因を語り始める。インスタント食品についての利便性を根拠に使うべきであるという立場に立っている子どもは、それぞれの筆者の考えの記述にある「便利さを上手に生かしながら」「なるべく使わないで」という表現から、「筆者は使う立場にいるが、使うとは言っていない点が違う。これは、〇〇というインスタント食品の問題点も事例に挙げているからだ」と答える。インスタント食品の問題点を根拠に使わないべきであるという立場に立っている子どもは、それぞれの筆者の考えの記述にある「便利さを上手に生かしながら」「なるべく使わないで」という表現から、「どちらの筆者も、使うとは言っていないが、結局は使う立場にいる。これは、インスタント食品の□□という便利な点を事例に挙げているからだ」と答える。子どもは、筆者の考えと複数の事例の因果関係から、インスタント食品についての多様な視点を見出してくる。発表された発言は、事実と考えとに分けて板書にまとめていく。

インスタント食品に対する多様な視点をつかんだ子どもは、その多様さから、自分の初めに決めた立場の根拠だけでよいのか、自分の初めの判断に迷い始める。この状態の子どもに、次の働き掛けを行う。

働き掛け2

自分の立場を再決定させ、そのように判断した理由を問う。

自分に必要な事例を選択させ、自分の考えに見通しをもたせる働き掛けである。自分

の初めに決めた立場に迷い始めた子どもに、「初めに決めた立場を変えますか、それとも変えませんか」と問う。問われることで、子どもは、**自分の考えを視点にして「比較するすべ」を使って、筆者の考えと事例の関係と自分の選択した事例と自分の考えの関係を**つなげ、改めてインスタント食品を使うべきか、使わないべきかを考え始め、自分に必要な事例を選択し、この事例を根拠に立場を決める。筆者の挙げる事例と筆者の考えの因果関係から、多様なインスタント食品に対する視点をつかんだ子どもは、初めの自分の立場に適する事例を選択して立場を変えなかったり、初めの自分の立場とは反対の事例を選択して立場を変えたりする。自分に必要な事例を選択して、立場を決めた子どもは、自分の考えが明確になる見通しをもつ。

自分の立場を決めた子どもに、「なぜ、その立場に決めたのですか。理由を書きましょう」と指示する。子どもは、「筆者の〇〇という事例から、やっぱりインスタント食品は使わないべきだと思います。なぜなら、～と考えたからです」「筆者の□□という事例から、立場を変えました。なぜなら、～と思うからです」と、明確になった自分の考えを表現する。

自分の考えを表現した子どもに、次のように働き掛ける。

働き掛け 3

初めの考えと今の考えでは、どちらが自分の考えがはっきりしているかを問う。

これまでの活動を振り返らせ、自分の考えが明確になったことを認識させる働き掛けである。自分の考えを表現し終えた子どもに、「初めの自分の考えと今の自分の考えでは、どちらが考えがはっきりしていますか」と問い、記述させる。このように問われることで、子どもは、初めの自分の考えの記述と今の自分の考えの記述を読み比べる。そして、「初めの考えよりも、今の考えの方が、自分の考えがはっきりした。」「初めは考えていなかったことが、事例を読むことで分かった。この事例を選んで考えることで、自分の考えが新たなものになった」と、ここまでの活動を振り返り、自分の考えが確かなものになったり、変容したりしたことを認識する。自分の考えが明確になったと認識した子どもは、本単元での読み方に有用性を感じ、今後の「読むこと」の学習においても、自分の考えを基に文章を読み、**自分の考えを明確にしながらかもうとする**のである。

6 本時の構想 4 / 8 時間 (45分授業)

(1) ねらい

インスタント食品に対する自分の考えを、自分に必要な事例を選択して明確にし、考えが明確になったことを認識することができる。

(2) 主張 (展開) 3Q (45分)

このような子どもに (C0)

- 提示された論題「自分の食生活の中で、インスタント食品を使う方がよいか、使わない方がよいか」に対して、既存の知識や経験を基に考え、立場を決めている。
 - ・インスタント食品は、簡単に作ることが出来るので使う方がよい。
 - ・インスタント食品は、健康に悪いので使わない方がよい。
- 論題について討論会を行うことを知っている。
 - ・自分の考えをしっかりとするため、もう少しインスタント食品について知りたいなあ。【問いをもった状態】
- 教材文「インスタント食品とわたしたちの生活」と「食と生活」とを読み、筆者の考えを読み取っている。
 - ・筆者の考えは、「便利さを上手に生かしながら、豊かな食生活をつくりあげていきたい」「なるべく使わずに、豊かな食生活をきずきあげていきたい」だ。
- 自分の考えとそれぞれの筆者の考えの差異を意識している状態である。

このように働き掛けると【働き掛け 1】

- それぞれの筆者の考えと自分の考えの差異と、その理由を問う。
 - 【発問】「それぞれの筆者の考えと自分の考えは、違うと思っている人がいました。どの点が自分の考えと違うと思っていますか」
 - 【指示】「考えを発表してください。」
 - ※出された違う点を板書してまとめ、考えの差異を焦点付ける。
 - 【発問】「なぜ、このような違いがあるのだと考えますか」
 - 【指示】「考えを発表してください」
 - ※出された事例を、事実と考えとに分けて板書し、視点を意識付ける。

このようになり (C1)

- 自分の考えと筆者の考えの差異を発表する。
(インスタント食品を使う方がよい立場)
 - ・わたしは、「簡単に作れるから使う」という考えで、立場としては筆者と近いと思うけれど、筆者の「生かす」「なるべく」という点は、使うとは言っていないので、わたしの考えとは少し違う点だと思います。
- (インスタント食品は使わない方がよい立場)
 - ・わたしは、「健康に悪いので使わない」という考えです。筆者の「生かす」「なるべく」という言葉は、結局使うことになっているので、わたしの考えとは違う点だと思います。
- 差異の要因を筆者の挙げる事例に求めて事例の整理・分析を行い、その結果を発表し、インスタント食品に対する多様な視点をつかむ。
(インスタント食品を使う方がよい立場)
 - ・わたしと筆者の違いは、インスタント食品の味^味が工場で作られたメーカーの味で家ごとの味が失われてしまうという問題点があるからだと思います。
 - ・筆者の考えと少し違うのは、インスタント食品に心^心がこもっていない^心くて、作ってくれている人に感謝の気持ちをもてなくなるとい^心う問題点から生まれていると思います。
- ※その他に、食品添加物を取り過ぎる・味付けが濃い・料理をすることが少なくなる・栄養のかたよりの点についても、意見が出される。
- (インスタント食品を使わない方がよい立場)
 - ・わたしと筆者の違いは、インスタント食品が料理の時間^{時間}を短くするという便利さがあるからだと思います。
 - ・筆者の考えと違うのは、洗剤や汚れた水、生ゴミの量が減るインスタント食品は環境^{環境}にやさしい^{環境}という良さがあるからだと思います。
- ※その他に、家庭で手をかけて作る料理とあまり変わらない味や香りがある・長い間保存できる・価格という面でも安く済む・ほとんど料理をしなくても食べられる・いつでも、どこでも、誰でも買うことができるという点についても、意見が出される。
- 多様な視点があることで、自分が初めに決めた立場の根拠だけでよいのか、自分の判断に迷い始めている。

このように働き掛けると【働き掛け2】

- 自分の立場を再決定させ、そのように判断した理由を問う。
【説明】「それぞれの立場で、多くのインスタント食品に対する視点が出てきましたね。初めの自分の立場でよいか迷っている人もいますよ」
【発問】「あなたは、初めに決めた立場を変えますか、それとも変えませんか」
※立場を変えるか、変えないかの判断結果を、挙手させて見取る。
【発問】「なぜ、その立場に決めたのですか」
【指示】「その立場に決めた理由を書きましょう」
※ワークシートを配り、自分の考えを記述させる。

このようになり (C2)

- 自分に必要な事例を選択して自分の考えに見通しをもち、立場を変える、あるいは、変えない判断をした理由を記述する。
(インスタント食品を使う方がよい立場)
 - ・わたしは、立場を変えませんが、なぜなら、インスタント食品が環境にやさしい食品だということから、地球環境を守るためにも必要な食品だと思ったからです。便利だけでなく、汚れた水や生ゴミを減らせ、環境を守れるインスタント食品は、使った方がよいです。
 - ・わたしは、初めと同じ立場です。理由は、やっぱり便利だからです。簡単に作れるだけでなく、長い間保存できたり、いつでもどこでも買うことのできるインスタント食品は、良い点がたくさんあり、忙しい現代の人達にピッタリの食品だと考えます。
 - ・わたしは、初めの立場を変えました。確かにインスタント食品は、ほとんど料理しなくても食べられるけれど、そのせいで料理が下手になってしまうのが心配だからです。インスタント食品に頼りきってしまうと、誰も料理することができなくなって、そのうち食べ物すべてがインスタント食品になってしまうかもしれません。インスタント食品は、使わない方がよいと考えます。

